

【提案3】

学校と地域をつなぐ授業づくり

— 地域と関わり合って学び、新たな“ゆいまー”を考える —

嘉 納 英 明

はじめに

この報告では、まず、私の教職生活をふりかえるなかで、沖縄の子どもの生活の実態と教育格差について感じたことを率直に語りたいと思う。また、こうした子どもと共につくってきた授業を通して、地域とは何か、保護者や地域との協力のあり方について日々悩みつつ、考えていたことを報告したいと思う。

1. 子どもの中の生活格差と教育格差 — 小学校の教師として感じていたこと —

1989年度（平成元年度）、私は沖縄の小学校教師として採用された。初任者研修制度の完全実施の年である。この年から数えて公立の小学校で12年余、国立大学附属校で5年、合計17年余の教師経験を経て、現在、大学教師として学生指導に関わっている。地元の大学で教員免許を取得し、九州・熊本の大学院で修士課程を修了した私は、迷わず、沖縄に帰った。当時、小学校の教師として教壇に立てたことに喜びを感じ、誇りを感じていた。なぜなら、戦後沖縄の教育を再建し、“祖国復帰運動”の中心的な役割を果たした沖縄の教師の仲間入りを果たした、という思いからである。

最初の赴任校は、沖縄島の中南部の具志川市（現、うるま市）の公立小学校であった。米軍施設の一部が市に返還され区画整理事業は完了していたものの、未だ広大な米軍施設が市の北東部を占有している。軍施設に隣接して軍関係者のための高層アパートが数棟建っている。赴任した学校は、学級数26であり、市内ではやや規模の大きな学校であった。教師になって初

めて受け持つ学年は、5年生であった。子どもとの学校生活は楽しく、教材開発も充実していた。地区の小学校社会科研究会に入ったのもこの頃である。一方、子どもの生活の実態を見ると、すでに個々の家庭の生活力の格差は大きな開きがあったと思う。担任をしている35名程の子どものうち、母子・父子家庭は1/3を占め（平成17年度の統計では、婚姻率全国第2位、離婚率第1位である— 沢山結婚して沢山離婚する姿か）、就学援助（要保護・準用保護世帯）も同程度の割合で、一部で給食費未納問題がすでに表面化していた。ある兄弟3名の給食費未納が続き、その額は10万円を超えていた。隔月徴収1,500～2,000円程の学級徴収金が払えなかったり、5,000～7,000円程の「卒業アルバム」の代金が払えない家庭があり、修学旅行費（当時10,000円程、県内で一泊二日）の捻出に困る家庭もあった。両親の離婚後、兄弟姉妹が離ればなれで生活したり、父親が県外で季節労働者として稼いでいる間、年金生活の祖父母と一緒に生活している子もいた。これが、12年余の公立校で見てきた子どもの生活の姿である。沖縄県の所得の平均は、復帰時、全国の59%、1985年度で74%、近年は70%台で推移している。2004年度は、全国で唯一200万円を割り込んだ（全国の平均所得は297万円、沖縄県は198万円の第47位である。東京都は460万円）。県民所得の低位な状況を、学校のウチ側から子どもを通して肌で感じた時期であった。

5年間、国立大学附属校の教壇に立った。そこでは、公立校に通う子どもの生活との「格差」をまざまざと見せつけられ、驚いた。附属校の一年目の学級の子どもの家庭の1/3は、開業医を含め医師や歯科医であった。大学教員や

小中高校教師、市役所等の公務員も多く、会社役員もいる。授業参観日は数多くの保護者で賑わう。PTA行事も数多くあるが、参加率はすこぶる高い。私が担任をしていた5年間で就学援助を受けている家庭はなかった。経済的に安定している家庭の子どもが附属校に通う実態がみてとれ、公立校に通う子どもの生活・教育環境の格差を強く感じた。放課後は、進学塾、ピアノ、水泳、バレエ、新体操等の習い事に通い、長期の休みになると県内外や国外へ旅行に出かけていく。学校に対する関心が高い反面、学校・教師に対する要求水準も高い。先の公立校では、私立中学を受験し進学する者は、学年で1～2名であったが、附属校の学年成績トップ集団（15～20名ほど）は、ほぼ県内の私立中高一貫校（進学校）志向であった。小学校の時に教えた子が、有名私立中学校や難関高校へ合格したことが伝わったり、地元新聞に「合格者」として名前が掲載される。公立校の子どもではなく、圧倒的に附属校の時の子どもが多い。ちなみに、沖縄県の高校進学率は95%（全国97%）、大学進学率は34%（全国49%）で、いずれも全国最下位である。

2. 沖縄の教育研究と日々の授業との接点・重なりー沖縄戦と市場の学習ー

平成元年度以降、沖縄県の教育の最大の課題は、学力向上にあるとされ、様々な対策が講じられている。これは沖縄の子どもの学力の本土並みを目指して推進されているものである。沖縄の学力問題は明治期の近代学校設立以降、繰り返し論じられているが、沖縄の学力の“低位な状況”が戦後も一貫して続いていることに対して、沖縄県は、本腰を入れて施策を展開しているといえる。特に、1972年の沖縄の日本復帰後、沖縄の学力問題をめぐる論争・施策は多い。県教育委員長であった大浜方栄氏の「学力低下の最大の責任者は教師である」という発言（1977年）、琉球大学に医学部を設置しても県内から合格者が出るのか不安であるとの声（1981年）、全県一区の県立学校を設立して遅しい進学校をめざすなどの施策（県立H高校問題、1986年）は、常に世論を賑わし、社会問題化し

た事例もある。高校中途退学者の増加（沖縄県では毎年1,000～1,500名程度の中途退学者が出ている）や底辺校といわれる子どもの荒れも表面化していた。こうした沖縄の学力をめぐる論争や施策の延長線上に学力向上対策があり、その本格的な始まりと共に私の教師生活は始まった。

私は、沖縄の小学校の教師として、子どもに確かな学力をつけさせたいと日々努力してきたつもりである。職員会議で決まった、朝のはげみ学習や読書指導、基礎的な習熟をめざしたドリル学習等、他の教師と同じように、場合によっては他の教師以上にこなしてきた。しかし、私は、元々、沖縄の歴史や文化に関心があり、小学校教師の傍ら、沖縄の戦後教育史研究を細々と続けてきた。この地味な沖縄研究と日々の授業との接点・重なりが、沖縄戦であり、庶民の生活史であり、沖縄の基地問題であった。これらの題材を教材化し授業として取り組むことは、沖縄の教師として非常に大切なことではないかと考えていた。沖縄の基地問題を題材とする授業実践は、「3. 地域と関わり合って学ぶー附属校での実践からー」で報告するとして、以下、沖縄戦の学習と市場を題材とした実践例の骨子を紹介する。

（1）公立校での実践1ー沖縄戦から学ぶー

私の2校目の実践である。6年生の子どもたちに沖縄戦についての学習と平和の尊さについて考えてもらいたいと願い、遠足で、糸数壕（アブチラガマ）と平和祈念資料館（糸満市）の見学を組み込んだ。いずれの地も激戦地として知られている所である。事前学習として、沖縄戦の経過、被害の実態、渡嘉敷島・座間味島における集団自決、ひめゆり部隊と健児部隊等に関する資料を子どもたちと読み合った。遠足の当日、壕内の見学に続いて詩「平和の誓い」を群読した。戦跡巡りの学習後、6月23日の「慰霊の日」の特設授業で、沖縄戦のあらましの再学習、ビデオ・映画の視聴、沖縄戦資料展（図書室）の見学を行い、戦争体験者からの聞き取り調査を計画し実施した。戦争体験者からの聞き取りは、戦争の中を必死に生きた証人に直接ふれることであり、それを通して戦争がも

たらず悲惨さ、命の大切さ、平和の尊さを肌で感じる機会であった。子どもの聞き取り調査隊の中には、地元の病院や老人施設と直接交渉し、戦争体験を話して頂ける方を紹介してもらう等のグループもあった。調査を終えた子どもたちは、戦争がこの沖縄であったことを肌で感じ取り、戦争を体験した人たちの証言から戦争の醜さ、悲惨さを学び、平和への誓いを新たに決意した。

(2) 公立校での実践2ー市場の活性化を考える(まちづくり学習の視点から)ー

私の3校目の実践である。校区内には、市場がある。30~40年ほど前までは、結構な賑わいをみせていたが、今では、昼間でも閑散としている。子どもたちは薄暗いこの市場に親近感はない。子どもたちは、現在の市場もかつては活況のあった市場であったことを聞き、校区に住む住民や市場の店主の願いを聞き取る。「たくさんのお客さんに来て欲しい」「大きな駐車場が欲しい」というのが市場で生活を営む住民の切実な声である。子どもたちは市場を元気づけようと、市場内の花屋や鰹節店を手伝ったり、来客を呼びかける看板やポスターを描く等、工夫を凝らしていく。教室では、聞き取り調査をもとにした、将来の構想図「夢と希望のまち」を完成、市長へ提案した。子どもによる地域調査と活動が進む中、子どもたちは活況のあった市場の再現を望むようになる。人びとが行き交い、買い物を楽しむ、あの40年前の市場の姿である。一日だけの「子ども市場」開催に向けて、子どもたちは、校区内の商店やスーパー、近郊の農家から飲み物や野菜を仕入れたり、沖縄の銘菓“ちんすこう”をレシピをもとに焼き上げたりした。吹奏楽バンドのパレードと演奏で「子ども市場」は開場し、市長や地域住民の方々が多数来客、40年前の市場の活況を味わった⁽¹⁾。

沖縄戦の学習は、戦跡巡りから始まり、地域のお年寄りから体験を聞き取り、沖縄戦の実相に迫るというスタイルであった。教室から地域に出向き、そこで学んだことを教室に持ち帰り、沖縄戦の学習を深めるものであった。一方、市場の活性化を考える学習は、子どものまちづく

りに対する関心を引き出しながら、校区を中心とする地域住民の理解と協力を得ながら学習を展開したものであった。こうした公立校での実践を通して、私は、保護者や地域住民は、子どもの学びや育ちに関わる内容を担任や学校側が地域父母住民に丁寧に説明し協力を得ようとする姿勢を見せると、惜しみない協力をして頂けるものと実感した。地域の中で子どもが育ち、地域で子どもを育てるという感触を得た貴重な経験であった。この実感と感触を次の附属校でも大切にしたいと考えた。しかし、附属校の校区は広範囲であり、子どもの大半は自家用車による通学である。附属校に着任して、「附属校にとって地域とは何か」「附属校と地域の連携を通した授業づくりとは何か」について悩み、試行錯誤を続けることになる。

3. 地域と関わり合って学ぶー附属校での実践からー

附属校に着任して真っ先に感じたことは「地域が見えない」ということであり、「地域という実体がつかめない」というものであった。子どもにとっても附属校周辺地域は身近な存在ではない。子どもは、授業後、自家用車やバスで帰るのであるから、学校周辺で遊んだりする経験はほとんどない。そうであるなら、学校の周辺地域で子どもが学べる仕組みを作り出すことで、附属校の子どもが何をしているのかを地域住民に伝えることになり、子どもにとっても教室の窓から見えるだけであった地域がより身近な存在となり、地域への愛着心が芽生えるものになるのではないかと考えた。着任した年には、進路学習の一環で、様々な職種を調べたあと、学校周辺の職場で体験をする計画を立てた。先の市場での実践で職場体験は子どもにとって好評であり、地域住民の生き様を学ぶ上で大切なものだと考えたからである。子どもたちは、学校周辺の保育園、本屋、給油所、ペットショップ、花屋、ファーストフード店で職場体験をした。手作りの紙芝居や創作ダンスを保育園で披露したり、客に対する挨拶の仕方や給油方法をスタンドで学んだり、あるいは、花の生け方や接客法を学んだのである。こうした職場体験を

通して、子どもは、様々な職種にふれ、職に携わる人々から職のもつ面白さや職に携わる意味（生きがい、喜び、生活をするために大切なこと）を学ぶ機会を得たのであった⁽²⁾。職場体験の学習により、子どもが教室から出て学ぶ社会体験の大切さをあらためて感じ、また、子どもの地域意識は関わりの中から生まれるのではないかと考えるようになった。

（1）地域の問題→基地問題

附属校の子どもの半数は宜野湾市から通い、普天間基地を身近に感じている。つまり、地域の問題として基地問題があるということである。私は、基地を地域素材のひとつとしてとらえ、教材化できないかと考えた。基地をめぐる問題として、爆音問題、墜落事故の危険性、県内移設問題等についても取り上げ、これらを日本国憲法の平和的生存権との関連で追究させたかった。子どもたちは、『新しい憲法のはなし』（文部省作成）の挿絵から、「戦争放棄」の考えを読み取り、日本が独立を回復したものの、沖縄が引き続き米国の直接支配下におかれ、基地建設が進んだことについて関心をもった。続いて、沖縄戦において日米両軍の熾烈な戦闘があった高台から普天間基地を展望し、同時に、基地の歴史と機能、役割、問題等について市役所の基地渉外課の説明を聞いた。宜野湾市の25%が基地に占められ、基地と隣り合わせで生活している市民の実態を子どもたちは実感したのである。子どもは、基地建設のために強制的に土地が取り上げられたことや小学校にジェット機が墜落した事件について調べたり、墜落事故に遭遇した方への電話インタビュー等により、基地被害の実態に迫った。子どもが基地をめぐる今日的な問題として集約したのは、普天間基地の県内移設問題であった。何度も繰り返し話し合い、子どもの出した結論は、「普天間基地は名護市に移設しないで、事故や事件が起こらないようにするように努め、安保条約についても見直していく」ということであった。ただしこれも、現時点におけるひとつの方向性を示したものであり、「新しい考えが出てきたら、その時にまた、話し合うことが大切」だという子どもの意見は、沖縄の基地問題を絶えず議論し、よりよ

い方向で沖縄の未来を切り拓きたいとする願いでもあった⁽³⁾。

（2）基地に消えた村に迫る

ところで、基地の学習を通して子どもの関心をひいたことは、基地建設以前、そこには集落があり、豊かな農業地帯が形成されていたという事実である。大正期、宜野湾村（現在の宜野湾市）内には、軽便鉄道が走り、3つの駅があった。また、琉球松の街道があり、宜野湾並松と呼ばれていた。しかし、戦後、普天間基地とキャンプ・ズケランの建設により、住民は強制的に土地を接収され移動を余儀なくされた。なかでも、安仁屋は、キャンプ・ズケランに接収され、行政区域名も消滅し米軍基地下に眠る村であり、闘牛場で賑わった神山の大部分も普天間基地の下にある。こうした事実は、「昔から基地があった」と考えていた子どもを大いに揺さぶるものであった。

「基地に消えた村」の学習は⁽⁴⁾、子どもの問い「普天間基地ができる前は、何があったのか」から、始まった。基地が建設される前の状況をどのように調べていくのか、追究したい内容と方法について話し合いをもちながら、一方では、消滅した集落・安仁屋の元住民（市軍用地主会会長）の話を聞く機会をもった。ゲストの話によると、安仁屋は、キャンプ・ズケランの建設により完全に消滅した集落であること、村内で最も小さな集落であったこと、サトウキビやイモ、田イモ等の農産物を生産し、拝所、製糖小屋等があったこと、である。子どもたちは個々の追究課題を持ちながら、活動を展開した。宜野湾市立博物館を訪ねる子、市役所文化課職員への電話インタビューや直接資料を収集する子、市役所や区の公民館を介して戦前の宜野湾村に住んでいた方を訪ね、聞き取り調査をした子、駅跡や軽便鉄道が走っていた橋や並松街道の今を確かめたりした。子どもの聞き取りに応じた方は、二十数名を数えた。子どもの追究活動は、夏休み中も続き、2学期が始まった9月には、中間報告会を開催した。現在、普天間基地下に眠る神山は、農業が盛んで共同の井戸が数多くあったこと、また、並松は500年程前に植えられ、琉球国王も普天間宮への参拝の

折りには通っていたこと、並松の側には市場が繁盛し、富裕層は馬場（今の競馬）を楽しんでいたこと、麦の大祭や稲穂祭等の行事についても丁寧な報告があった。

教室から出て、やや広範囲の調査活動をしていくためには、保護者の協力が不可欠であった。話者の選定は子どもの希望を聞き入れながら、担任と保護者が連絡を取り合い、地域の古老にアポを取り付けたり、子どもと保護者が区の公民館や市役所の市史編さん室を訪ねて、話者を紹介してもらったりした。子どもによる聞き取り調査の際には、保護者も同席した場合もある。子どもと共に学習活動を進めた母親は次のように語っていた。「自分たちの住んでいる宜野湾には普天間基地があって、それは、私が生まれたときからそこにあった。基地がなかった頃の宜野湾のことについては全く知らなかったし、考えることもなかった。子どもと一緒に学習して、昔の宜野湾には、鉄道や井戸や畑があったことを知った。宜野湾にも昔ながらの沖縄があったんだと思った。」子どもの学習で始まった「基地に消えた村」は、保護者にとっての地域学習にもなり戦前の宜野湾村を考える機会にもなった。

（３）専門家との意見交流—軽便鉄道をめぐって—

学級の約1/3が軽便鉄道について追究活動をしている中、軽便に対する幅広い知識や見識にふれ、学ぶことの面白さを肌で感じて欲しかった。そこで、元沖縄県立図書館長の金城功さんを招き、子どもとの意見交流の場を設定した。軽便鉄道について明らかになったことは、次のようなことである。

昭和天皇は皇太子の頃、沖縄島の東海岸に位置する与那原から那覇まで軽便列車に乗車した。それは「お召し列車」と呼ばれていた。子どもは、調査活動を通じて当時の乗員のご子息から証言を得、「古波蔵」と名乗るウチナアンチュであったことを突き止めている。次に、那覇—与那原線が開通したのは、与那原に良港があり物資の輸送手段として軽便が必要であったこと、那覇—嘉手納線、那覇—糸満線の開通は、嘉手納や糸満に製糖工場があり、キビや砂糖の運搬

に軽便が必要とされた。こうして、沖縄の中核都市・那覇と各地を結んだ軽便は沖縄の経済活動の動脈であることを子どもたちはつかんだのである。ところで、沖縄の軽便には「駅弁がなかった」というのが金城功さんの考えである。沖縄の鉄道の距離は短く、各駅間の乗車時間も長くはないからというのが理由である。この考えと対置するかのように、子どもの報告は、駅構内で駅弁を購入しまたは買って食べたという証言を得ている。これを聞いた金城さんは、「私は、（略）関係者の話を聞いても沖縄では駅弁はなかったって言う話でした。ですから、今度もう少し調べて、本当にあったのか、あるいは、駅弁というようなものがね、今売店でパンを売ってるような感じでね、何か売っていたのか。この点は、改めて調べなければいけないなあと感じました。」と述べた。その他に、軽便の速度が遅いためタダ乗りがあったことや坂道では極端に速度が落ちた乗り物であったこと、列車の転覆事故や火の粉による火事があったこと等、子どもが明らかにした事実は多岐にわたるものであった。

（４）学びの総括—大型紙芝居の制作と保護者による読み聞かせ—

学びの総括は、大型紙芝居の製作である。子どもと保護者の合同による製作である。シナリオ作成とそれに基づいた原画作りは、保護者の協力を得ての活動であった。紙芝居のあらすじは次の通りである。主人公・るん太は、戦前の宜野湾村にタイムスリップし、一人の少女・ツルと出会う。紙芝居には、軽便鉄道や琉球並松が描かれている。るん太は、ツルとの別れの時、村の地図をもらい、ツルはるん太からお守りを受け取る。この後、沖縄戦で多くの県民が亡くなることを事前に知っていたるん太は、「戦争を生き抜いて欲しい」という願いでツルにお守りを渡した。現代に戻ってきたるん太は、同居している祖母がかつてのツルであることを、祖母が身に付けているお守りで気がつくという展開である。完成した紙芝居は、他の学級に向けても上演し、保護者の「読み聞かせ隊」により、市内の学校でも上演が試みられた。

子どもたちは、元住民の生きた証言を聞き取

り、これらをつないでいくことで「村の姿」を描いてきた。元住民の証言を学級に持ち寄り、討議することで、証言の意味を共有していこうとする地味な活動を続けてきた。「大型紙芝居」のエピローグは、「昔の宜野湾」という合作詩である。この詩では、自然に恵まれた村民は、けっして豊かな生活とはいえなかったが助け合い、支え合い、平和に生きていたことをうたっている。詩は、「いつの日か あの村にしずむ夕日をみたい」と締めくくっている。この文章は、「基地に消えた村」のテーマに迫り、学びを深めてきた子どもの郷土・宜野湾村に対する思いであり、願いである。

4. 授業をひらきながら、父母・地域と結びつくこと→新たな“ゆいまー”とは？

教師の世間知らずといわれるが、世間も学校の実情を十分に知っているわけではない。両者の間に何かしら距離感とちょっとした緊張感を感じながら、私は、学級の中で日々起こっているドラマを保護者に伝える努力をしてきた。それは、学級懇談会であったり、学級通信や作品集、あるいは文集等であった。上記の授業を行うに際しても、担任だけでできないことは、保護者の理解と協力、意向を受けながら活動を進めてきた。保護者や地域に“授業をひらく”という姿勢や、父母・地域住民にとって“授業がみえる（授業の可視化）”ようにしたことで、学校と父母・地域住民がつながり、相互に学び合いの機会があったものと考えている。また、関わり合いの中で地域意識が芽生え、より強く地域問題をとらえるようになることを実感した。子どもと教師が教室から地域に出て学習活動を進めていく中で、地域の学校理解が深まり、そして協力を受けながら、よりよい活動が生まれ出てくるものではないだろうか。学校と地域とのつながり方は、様々な形態があっていいし、どのようにつながるのか、どのような回路を築いていくのかというのは、学校や地域の実情によって随分違ったものになるのではないだろうか。学校と地域とのつながり方の多様化は、むしろ歓迎されるべきで、個々の学校とその地

域が連携した子育てと子どもの育ちはきっと豊かなものになるだろう。

こうした授業をひらきながら、父母・地域と結びつくことの大切さを述べたところで、学校・父母・地域の連携のあり方をひとつ提案したい。これまでの沖縄では、地縁血縁関係を基盤に様々な活動が生まれ、子育てを互いに支え合い、サポートしてきた。いわゆる、“ゆいまー”の精神で、他人の子どもも自分の子どもと同じように接し、隣近所の子どもの育ちに関わってきた。つまり、子どもを地域で支えることの大切さをお互いに共有してきた歩みがある。これは、厳しい生活の中でも、沖縄本来の風土の中で行われていた地域による子育て、支え合いの地域づくりともいえるものであった。例えば、^{宜野座村}惣慶区の学習会は、まさしく、“ゆいまー”を基盤とした学習会活動である。地域の子どもの学ぶ場所づくりを、区民総ぐるみで創り上げ、現職教師や元教師の協力を得ながら学習会活動を30年間継続しているというものである。しかし、他の地域では、惣慶区のような取り組みはなかなかできない。沖縄の地域社会は、これまでのような強い絆で結ばれているとは限らないので、新たな支え合いの仕組みが必要になっている。子育てに関わる個々人や全ての教育団体（子育てサークル、子ども教室、子ども会、スポーツサークル、読み聞かせ会等）が集い、お互いの置かれている状況を出し合い交流し、全体がまとまってひとつの課題を解決していくことが大切になってくる。沖縄のこれまでの“ゆいまー”を学び、現在の活動を交流し、新しい“ゆいまー”のかたちを模索する活動が生まれている（2007年5月「沖縄子ども研究会」発足、事務局：沖縄大学）。こうした新しいかたちの“ゆいまー”は、子育てを含む教育課題を、地域父母住民と学校が共同的に取り組むものであり、定期的に討論する場と本音で語り合う場がそこにはある。つまり、子育てに関わる「学び」と「つどい」の空間を新たなかたちで創造していくことが求められている。

父母・地域の新たな“ゆいまー”を模索しつつ、学校も授業をひらいていくことで、ユニークな子育ての地域文化の創造が期待できるもの

と思う。

ゆいまーる：「結（ゆ）い」を意味する沖縄島及び周辺離島の方言。「ゆい」は、結い＝結合＝共同＝協働、「まーる」は順番のことを意味する。相互扶助と平等の原則がある。

注

- (1) 寺本潔（愛知教育大学）のまちづくり総合学習に関する実践的な研究に学びながら、私は、校区内の市場の活性化問題を子どもと共に向かい合った。詳細は、拙稿「子どものまちづくり実践～中心商店街の活性化問題と向き合った子どもたち～」(中小商工業研究所『中小商工業研究』第75号、2003年4月、所収)、または、拙稿「まちづくり総合学習に関する事例的研究」(『琉

球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』第13号、2004年3月、所収)を参照のこと。

- (2) 拙稿「小学校における職業体験学習の教育的効果に関する実践的研究」『平成14年度科学研究費補助金(奨励研究)研究成果報告書』2003年3月、参照。
- (3) 拙稿「日本国憲法と沖縄の基地問題～小学校六年生が普天間基地の県内移設を考える～」(『教育』No710、国土社、2005年3月、所収)を参照のこと。
- (4) 授業記録の詳細は、拙稿「基地に消えた村」(『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第12号、2005年3月、所収)を参照のこと。

参考文献

- ・沖縄県企画部『沖縄県のすがた』平成19年。

(名桜大学)